

## 思い出の整理と処分

国崎クリーンセンター啓発施設 所長 鈴木 榮一



編集会議で、親族の話や半世紀以上前の幼児体験、そして義祖母から影響されたライフスタイルを語ったところ、その切実で貴重な体験談を本号に執筆せよとの命が下った。そこで、恥ずかしながら、筆者の思い出や暮らしの変化などを織り交ぜ、ストックごみや引越処分について述べてみる。

## ① 幼少時の実家の思い出

## 1-1. 昭和30年代の記憶

筆者は、首都圏で生まれ育った。首都圏と言えば聞こえがいいが、昭和30(1955)年頃は、木造の小さな駅舎に輪タクが待つ、デパートやスーパーもない鄙びたベッドタウンで、まだ戦争の傷が人々の心に疼く時代であった。

実家が商店を営んでいたせいだろう、当時いたずらっ子だった筆者は商売の邪魔だからと、母親に連れられ頻りに親戚の家へやられた記憶がある。行く先はたいがい、両親が通称名で「○○おばさん」と呼ぶ老女宅で、老女からお菓子をもらったり、昔話をきかせてもらったりして時を過ごした。そこには若い人、ことに男性の姿は皆無であって、どこも線香臭い陰気な空気が漂っていて、あまり好きにはなれなかった。筆者の先祖は豪農であったということで、市内にこのような親戚がとて多く、祖父母の従妹や大祖母(または大伯母)にあたるような、今もって家系的に判別できない人々がいた。女性が多い理由は、主に家族の戦死によるものだが、戦前までの医療技術は現代と比べ低く、子ども(特に男子)の

病死が多かったようだ。筆者の父は昭和一桁生まれだが、戸籍上兄弟が幾人いるけれども、幼少期にすべて病死してしまい、一人息子として育てられたという。そんな時代背景から、親族には跡継ぎもいない寡婦が多く、筆者のような幼い子どもはかわいがられた。

親族が亡くなっても、子どもは葬儀に招かれることはまずないが、しばらくしての形見分けの日は、いたずらっ子を家に残すよりはと、母に連れられて行くことになる。

今も、ある独居老女の形見分けの記憶が鮮明に残っている。亡き老女の居間に母をはじめ親族の女性が数名座り、故人を偲びながら生活用品の整理をしている。集まった者で遺品の品定めをしつつ形見分けするのだ。それが一段落すると、今度は調度品の分配がはじまる。筆者の実家は本家だからか、引き取り手のない調度品はすべてわが家へやって来た。

時を経て、現在もそれらは実家にある。昔ほどの家にもあった茶箆筒、今はテレビドラマの中か骨董屋でお目にかかるようなものが、現在実家のリビングに2棹、裏玄関に靴箱代わりの1棹、そして倉庫



写真1 今も残る茶箆筒の一つ

に数棹ある。そのほか桐の和箆筒も3棹ある。箆筒の中身もいっしょに形見分けされたようで、和食器をはじめ和服や反物などが収納されたまま、手がつけられない状態だ。

## 1-2. モノをため込む習性?

筆者の実家は、大工道具専門の刃物店であった。物心がついた頃の実家は、「しもたや」と呼ばれた古家を改造した、店の裏に小さな台所と居間(ちゃぶ台と茶箆筒のセットがあるだけ)がついた質素な店舗兼住宅であった。父の商売が軌道に乗ってきた高度経済成長期あたりから改築を重ね、2階建ての物置まで併設する店舗に拡張した。部屋が増えたばかりか、モノも格段に増えていった。

両親は、それまで買う余裕も置く場所もなかったのに、新たにこしらえた戸棚や倉庫などのあらゆる収納場所へ、

捨てるべきモノまですべてしまい込んでいった。モノを処分するという考えがなかったかのように。後述するが、この60数年もの間に処分されたモノはほとんどないと思えるぐらい、壊れた家具や電化製品、不要になった靴、古い衣服、大量に買い込んだ生活用品や食品などが実家の至る所にしまい込まれている。3年前に父が亡くなり、実家の店や倉庫を整理する機会がおとずれて、この現状をはじめ知ったのである。

余談であるが、当時のわが家では、兵役経験のある近所の人たちが集い歓談する機会がよくあった。戦前の話が中心で、時には古い写真を見せられて、戦時における苦労話を聞かされた。あまり覚えていないが、それほど悲惨な話は聞かなかったと思う。しかし、戦時中から戦後にかけての食糧難や物資不足で貧窮にあえいだ話は、何度も繰り返し聞かされたものだ。モノを大切にしまい込む習性は、この苦労体験が少なからず影響しているように感じる。のは、あながち間違いではないだろう。

実家は、本家であるから先祖代々を祀る仏壇もある。昭和50年頃に整理するまで、仏壇には位牌がところ狭しと並んでいた。さらに仏壇の下にある引き出しにも、縁の遠い位牌が数基寝かされていた。ご先祖様は、かなり裕福な豪農だったらしいことが、お彼岸や命日とおぼしき日に焼香に訪れる縁者の数からみてとれたが、当時の生活レベルがそれほど裕福ではなかったのも、子ども心にはなんとも奇妙な感じがしたものである。



写真2 昭和40年代頃の実家

## ② 実家での整理について

### 2-1. 父の店の整理

5年前の暮れに父が倒れ、店舗を閉鎖した。父は、病室から仕事のことを心配していたが、もう復帰はできないことを言い聞かせ、店の整理を認めさせた。

60年間刃物店を営業してきた父は「目立て」と「研ぎ」の職人であった、商売はからきしヘタだった。それが幸いしたのか、商品棚の中には昭和30～40年代(1955～1974年)の商品がそこそこ残っていて、希少な商品も少なからずあった。筆者は、これらの店頭商品をネットオークションに出品した。父は損を承知で、値札の改訂をせずに、閉店するまで仕入れた当時の価格のまま販売していた。オークションの出品に

は、この値札をさらに半額にした価格から入札を開始したところ、次々と飛ぶように落札され、梱包・発送が追いつかないほどだった。中には、値札の40倍近くもの高価で落札された商品もあった。

素人の筆者がみても珍しいと感じた製品類は取り分けて、専門の博物館へ寄贈することにした。メカ機構をもった剃刀は関市の刃物系ミュージアムへ、大工道具の神様といわれた人物の写真と自筆色紙は神戸市の大工道具関係ミュージアムへ寄贈し、父の名前が後世に残ることになった。また、地域の資料館から学芸員が調査に訪れ、店内に掲げてあった商標飾りや船大工が製作したという船模型などを引き取っていった。こうして順調に店舗内は整理

がついたが、相続遺産の一部に組み入れたり、オークション販売を確定申告したりと、かなり面倒な経理処理が伴い、痛し痒しであった。



写真3 資料館へ寄贈した、大工道具の神様とも呼ばれる千代鶴是秀の自筆板

### 2-2. 実家の暮らしを整理

父が亡くなり、実家は母と弟の二人暮らしになった。しばらくして母に重い病気が見つかり、また障害のある弟も病気が進んで、この二人の暮らしも限界になってきた。

母は病気のせいもあるのか、記憶がかなり鈍くなり、ごみ処理や分別がまったくできなくなり、商品が消えた店舗にごみが蓄積されていった。冷蔵庫も食品が溢れかえり、すさまじい状態であった。逆に、倉庫に残っていた商品や父が開業以来つけてきた貴重な帳簿類を、母が業者に依頼して、すべて処分してしまった。しかも業者からは高額な処理費を請求されたが、なんの疑いもなく全額支払っていた。

また、ある電気店の口車に乗せられて、ほとんどの家電類を更新していた。家電量販店やネットで買えば安い製品を、ほぼ定価で購入していたのである。母が施設に入るまで、こんな状況が続

いていたから、父の残した遺産も2年間で3割ほど減ってしまった。

このような状況に至り、筆者が金銭管理から介護等の各種福祉サービスを受けるための連絡や交渉などの面倒を一手に引き受けることになり、これまで以上に頻繁に帰省しなければいけなくなった。

その後、地域の福祉組織や行政からの支援のおかげで、母はサービス付き高齢者住宅に入居、弟も長期入院からグループホームへの転居ができた。結果的に家族がバラバラになったが、本人達も支援のある暮らしに安心と満足を得ているようである。

こうして実家には、だれもいなくなった。

### 2-3. 実家の整理、分別が厳しい!!

母が実家に居たときは、気を遣い、ごみ処理や用品整理に口や手を出すことを控えていたが、今は心おきなく整理・処分することが可能となった。けれども、なかなか作業がすすまない。

60年以上も堆積した膨大な量の生活用品があるだけでなく、自分が生まれ育った家であり、亡き父の気配が残り、家族とすごした空間には幾多の思い出の品々があり、整理・処分の作業に集中できない。

ともあれ、目に見える場所だけとは、筆者が滞在するための空間だけでも確保するために整理をはじめた。すでに父の遺産相続にあたって書類関係の整理と処分はしていたが、生活用品についてはまったくの手つかずであった。

まずは、台所まわりから。

母や弟は入院先から施設へ移ったので、実家は生活していた時のまま、台所周りには中途半端な食品や調味料が数多くあった。その多くは消費期限切れで、中身をすべて取り出して容器を洗浄し分別しなければならない。見えるところにあるモノを処理するだけでもかなりの重労働である。冷蔵庫の中も同様で、こちらには作り置きした総菜などもあり、マスクと手袋を装着して作業にあたった。

つづいて、引き出しや戸棚に着手した。目一杯しま込まれている品々を取り出し、使えるモノと不用と思われるモノを分類し、使えるモノは種類別に仕分けして引き出しへ。不用品は地域の分別回収ルールに従って分類して各ビニール袋へ。これを引き出しや戸棚ごとに繰り返すのであるが、衣類系や写真・手紙系の場所にはどうも手がでない。また、親族から形見分けされたとおぼしき茶筌の中も同様にアンタッチャブルなのだ。

なんとかできる範囲だけでもと思い、分別・仕分けまでの作業を終わらせたが、これの始末がまたたいへんであった。

限られた日数で帰省しているから、地域の分別回収の予定とあわなければ、仕分けしたごみは、次に帰省するときまで実家に放置せざるを得ない。だから、地域の行政が発行している「ごみと資源物の収集カレンダー」のチェックは欠かせない事前作業だ。

さらに分別判断の基準についても地域差があって、なかなか難しい。ある日、筆者は地域の容器プラスチック類の分別

方法に従い、前述の台所周りから排出した大量の汚れた容器プラスチック類を「燃やせるごみ」との判断で仕分けして出したのだが、回収担当者は筆者が出したごみ袋に「分別してください!」という黄色のシールをつけて、回収してくれなかった。帰宅の予定時間が迫っているときに、本当にまいった。どうしようかと困っていると、近所の人が「いつも遠方からたいへんだわね。私が次の時まで分別して出してあげる」と親切にひきとってくれたのである。このあたり、日頃から両親がきちんと近所づきあいをしていたおかげと、感謝している。

### 3. 気丈な義祖母の「終活」に学ぶ

20年ほど前、妻の義祖母が亡くなった。義祖母は、明治生まれの職業婦人で生涯独身を通し、養子をとって家をつないだ気丈な人物だった。晩年、家庭内事故で寝込む頃までに、今でいう「終活」をしっかり済ませ、身の回りの品々は尽く分与してしまい、タンスの中までほぼ空っぽの状態であった。

筆者は、義祖母のこの潔い、人生の仕舞い方に驚きとともに強い影響を受けた。上述の家庭環境に育ったせいか、人生最大のショックであったといっても過言ではない。また、義祖母が亡くなる直前に阪神・淡路大震災に被災したこともあり、筆者の暮らしは、大きな転換期を迎えた。

仕事の関係で日本文学(古代)にかかわり、膨大な書籍を所蔵していた。この蔵書のため、新築した家(木造)では2階の書庫に耐荷重500kg/m<sup>2</sup>の増設工事をしたり、引っ越しのたびに運送業者さ



写真4 寄贈先の旧蔵書(整理中)

んに悲鳴をあげさせたりと、書籍の負担は家族関係までひびが入るほど酷いものであった。しかし10年前の引っ越しにあたっては家族のことを優先し、蔵書を整理する決断をした。引っ越しまであと一か月の時期に、奈良の某氏が資料室を作るということで、これらの蔵書をすべて寄贈したのである。寄贈が決まってから引越日まで連日、書籍の梱包・発送でんてこ舞い。L型の段ボール(ミカン箱よりちょっと大きめ)で合計70箱以上もあったのには驚いた。

この際だからと引っ越しにかこつけて、洋服や所持品すべても整理し処分した。なにせ家からマンションへの引っ越しだから、収納スペースが格段に小さくなる。某氏へ寄贈できなかった書籍のほとんどは電子化し廃棄したが、その他の不要書籍は古本屋へ持っ

て行った。衣類は廃棄処分するか古着屋へ。オーディオ類などは友人へ譲渡するか、ネットオークションで売却した。所帯をもってほぼ30年、これまで5回引っ越したが、この引っ越しにおいては、だいぶ身の回りをきれいに整理できてきたようだ。妻からは、まだまだと言われているのだが。

義祖母のような完璧な「終活」にはほど遠いが、身の回りが整理されたことで、収納スペースの狭さを危惧していたマンション生活も快適である。心もすっきり。しかも、筆者に万一の場合、家族への負担も軽減されるはずだ。

思い出は大切にしたいが、負担になるような「モノ」としての思い出は、とっとと処分すべきだと実感している。形あるモノは、いつかはなくなるのだ。